

## マンモグラフィーによるスクリーニングで乳がんの死亡率は減少せず

本研究では、マンモグラフィーによるスクリーニングを受けた場合と受けなかった場合で、25年間の乳がんの発症率および死亡率に違いが生じるかについて比較した。1980年から85年にかけて、カナダの6つの州の15か所のスクリーニング施設において40～59歳の女性89,835人を対象に、マンモグラフィーを受ける群（毎年のマンモグラフィーを計5回）と対照群（マンモグラフィー無し）にランダムに割り付けた。マンモグラフィー群の40～49歳の被験者と両群の50～59歳の被験者には、年1回乳房の身体診察を行った。対照群の40～49歳の被験者には、自治体で通常行われる検査1種のみとした。5年のスクリーニング期間中に侵襲性乳がんを発症したのは、マンモグラフィー群（44,925人）では666人、対照群（44,910人）では524人であった。さらにこのうち、25年間の追跡期間中に乳がんで死亡したのはマンモグラフィー群で180人、対照群で171人であった。マンモグラフィーが関係して死亡したとされるハザード比は1.05となった。40～49歳、50～59歳の年齢別にみた結果はほぼ一致していた。全研究期間の25年で乳がんと診断されたのは、マンモグラフィー群では3,250人、対照群では3,133人、さらに乳がんで死亡したのは各群それぞれ500人と505人となり、乳がんによる死亡率はマンモグラフィー群と対照群で大差なかった（ハザード比0.99）。したがって、40～59歳の女性に年1度のマンモグラフィーで乳がんのスクリーニングを行っても、乳がんの補助的治療が十分に受けられるならば、身体診察や通常の実地対応のみの場合と比べて乳がんによる死亡率は減少しないことが示された。

出典：British Medical Journal. 2014; 348: g366